V　1994年度の研究の評価

1.　アメリカ合衆国現地調査の評価

(1)　評価問題

《アメリカ合衆国現地調査の自己評価》　(1994. 8. 11)

2週間のアメリカ合衆国現地調査旅行，大変お疲れさまでした。今回の現地調査に関して，以下の質問に答えて下さい。（できるだけ具体的に書いて下さい。）

1.　今回の現地調査において，ねらいはどの程度達成できましたか。5段階で評定して，その数字を（　）書いて下さい。

(1)　グリーンビルでのフィールドスタディ……（　　）
(2)　グリーンビルでのホームスティ……（　　）
(3)　ワシントンD. C. のフィールドスタディ……（　　）
(4)　ミネアポリスでのフィールドスタディ……（　　）
(5)　現地調査全体……（　　）

2.　今回の現地調査において，ねらい達成の点で最も有益であったものと，最も有益でなかったものは何ですか。その理由も書いて下さい。

(1)　最も有益だったもの：　　（その理由）
(2)　最も有益でなかったもの：　　（その理由）

3.　今回の現地調査を改善するとしたら，どうすることが必要だと考えますか。

4.　もう一度現地調査を行うとしたら，今度はどんな内容をどんな方法で調査してみたいですか。

(1)　現地調査の内容：
(2)　現地調査の方法：

5.　今回の現地調査で特に学んだことを，具体的に3点挙げて下さい。

(1)
(2)
(3)

6.　今回の現地調査で学んだアメリカ合衆国の社会と文化について，児童・生徒に最も伝えたいことは何ですか。

(2) 評価の結果

アメリカ合衆国現地調査の終了時（１９９４年８月１１日の帰国時の飛行機内）において，今回の現地調査の参加教師１９名に対して，上記の評価問題によって自己評価を行った。その結果は下記の通りである。

① 現地調査のねらいの達成度についての５段階評定。

（調査問題１）

項　　日	平　均
(1) グリーンビルでのフィールドスタディ	４．４
(2) グリーンビルでのホームスティ	４．１
(3) ワシントンD.C.のフィールドスタディ	３．２
(4) ミネアポリスでのフィールドスタディ	４．３
(5) 現地調査全体	４．３

② 今回の現地調査において，ねらい達成の点で最も有益であったもの。

（調査問題２）

項　　日	人数
グリーンビルでのフィールドスタディ，ホームスティ	9
ミネアポリスでのフィールドスタディ	8
多くのアメリカ人との出会い	2

③ 今回の現地調査において，ねらい達成の点で最も有益でなかったもの。

（調査問題２）

項　　目	人数
グリーンビルでのフィールドスタディ，ホームスティ	6
ミネアポリスでのホームスティが中止になったこと	4
ミネアポリスでのフィールドスタディ	2
ワシントンD.C.で時間的な余裕がなかったこと	2
アメリカ人による一方的な説明	1
なし	4

④　今回の現地調査を改善するとしたら，どうすることが必要だと考えるか。
（調査問題３）

項　　目	人数
ホームスティの充実	7
事前研修・学習の充実	5
ハードスケジュール	5
事前にパートナーとの連携を強化すること	3
滞在箇所の厳選	2
現地調査の時期	2
現地調査の質的な向上	2
ホテルをシングルにすること	1

⑤　もう一度現地調査を行うとしたら，今度はどんな内容を調査してみたいですか。
（調査問題４）

項　　目	人数
人々の生活について	１０
学校・子ども・教師について	4
陪審制と人権について	1
大統領の選挙活動について	1
喫煙問題について	1
日米の伝統的な歌謡について	1
ゴミ処理とリサイクルについて	1
アメリカ人の日本観，日本人のアメリカ観について	1

⑥　もう一度現地調査を行うとしたら，今度はどんな方法で調査してみたいですか。
（調査問題４）

項　　目	人数
現地での観察	8
アンケート，インタビュー	7
ディスカッション	3
アメリカ人とともに行動する	2
ホームスティ	1

⑦　今回の現地調査で特に学んだことを，具体的に３点挙げて下さい。
（調査問題５）

項　　目	人数
アメリカの教育への取り組み	１３
アメリカ社会の多様性	7
アメリカ人の考え方	7
日米の相互理解の大切さ	6
人間としての共通性	5
コミュニケーションの大切さ	3
アメリカが移民国家であること	3
アメリカの物価の安さ	2
制度を変えることの難しさ	1
アメリカの広大さ	1

⑧　今回の現地調査で学んだアメリカ合衆国の社会と文化について，児童・生徒に最も伝えたいことは何ですか。（調査問題６）

項　　目
アメリカには，様々な社会と文化が存在し，それを互いに尊重していること
アメリカの食生活に影響を与えているエスニックフードにまつわる話
アメリカには，様々な機会があるが，実質的平等を果たすための規制等は少ないこと
人と人とを結ぶ食生活の大切さと共通性
日本人とは違うアメリカ人の気質
子供たちのボランティア活動
アメリカの学校
一国の理解はステレオタイプではいけないこと
アメリカ社会に，物質的・精神的な「余裕」を感じること
アメリカには好きなことをしろという考え方があること
日米両国には相違点もあるが，共通点も多くあること
日本の良いところを見つけてアイデンティティを失わないようにすること
日本の教育は，生徒を守っているという感じがすること
違いがあっても，それを互いに理解し，より良いものを作っていくことが大切であること
表現の仕方が違うだけで，人の心の中は特に大差がないこと
アメリカでは一人ひとりを独立した存在としてあつかうという考え方，生活様式，システム

アメリカには責任を伴った自由と選択が多く，それは個々の主体的な判断に基づくこと
アメリカの抱えている問題が絡み合って「アメリカ＝恐ろしい国」という印象ができたこと
自己理解が真の国際理解を生むこと
日本が多民族社会になる日もそう遠くないこと
違いを認めそれを吸収する広い視野を養うことの大切さ
アメリカでは，多くの生徒が自分の意志を大切にした言動をとっていること

2. 各チームの研究の自己評価

(1) チームＡ　（生田，津森，小田原）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

研究テーマは，「比べてみよう！日本・アメリカの国技ー「相撲」と「野球」でお互いを理解しようー」である。テーマの設定では，具体性があり，現地でなければ調査できないという観点を考慮にいれた。また，各自の重点的な役割分担を決め，それに基づいた事前の準備や教材研究を行った。これらのことは，事前研究を進めるうえに有効であった。

チームＡは，各自の住所が近い編成を生かし，事前研究の会をチーム独自で設定し，連絡や調整などすみやかに行った。

ただ，テーマに基づいた準備物は，一般には入手しにくいものであった。各方面への要請やお願いに，多くの労力を費やした。

［現地調査について］

生徒を集めての相撲スクールの実施，その意識調査，さらに学校訪問によるスポーツ施設の見学，スポーツ店でのインタビューなど，アメリカ側のパートナーの協力のもとに順調に調査することができた。また，テーマが具体的であり，興味・関心を引くものであったため，多くの人々から参考となる意見を聞き取ることができた。

なお，現地調査を進める中で，当初の計画を修正したり，新しい調査項目ができたりすることがある。弾力的な調査計画の運用を考えておく必要がある。

［事後研究について］

事前に，まとめのスタイルを想定して話し合いを行っていた。事後研究においても，現地調査での資料をもとに研究の方向を修正しながら，事後研究を進めることができた。なお，事後研究においても，研究会の日程以外，チームＡだけで会合を持ち，教材づくりを進めた。

なお，他チームとの意見交流は，教材づくりのポイントや研究の方向の修正に大いに役立った。

［教材開発について］

当初，教材は，始めから終わりまで使用して一つのねらいを達成するということで開発していた。現地調査や他チームとの意見交流により，どの部分をとっても教材として使用できるという考えに変更し，物語スタイルの教材を開発した。

② 来年度以降の課題

［事前研究について］

テーマに基づく事前の情報収集・準備等は，早めに行うことはもちろん，他チームからの情報提供が多いに役立つ。今後とも，事前研究において，各チームのテーマ，ねらい，方法やお願いを発表し，意見交流を行うことを大切にしたい。さらに，国際理解教育の研究・実践者を含めた事前研究の会を開いていくことを検討していきたい。

［現地調査について］

訪問先でのリクエストを早めに行い，渡米以前に収集できる予備知識を得ておきたい。さらに，今回の相撲スクールのように，日本文化を紹介するようなデモンストレーション的な現地調査を計画の中に取り入れる方向で検討したい。

現地調査の計画の中に，まとめの時間を意識的にとっておいた方がよい。

［事後研究について］

２学期は，学校行事などが多く，研究会の日に集まることが難しく，話し合う時間が少なかった。そのため，研究会の日時以外にチームＡは集まり，教材づくりを進めた。市単位，または隣接する市のメンバー構成が有効に機能したと考えられる。

［教材開発について］

授業実践を行い，その結果に基づいて教材修正をはかりたい。時間的に非常にむずかしいと思うが，教材づくりを第１次，第２次，第３次案というように，実践を踏まえて創る方向にもっていきたい。

また，開発した教材を実践することはもちろん，今回の各チームの教材を実践した結果を引き続き交流する機会を持ちたい。さらに，国際理解教育研究会の組織的な会を設立する方向に持っていきたい。

(2) チームＢ　（朝倉，鈴木，高橋）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) チームＢは，日米の衣食住を家庭電化製品を通してみていこうと考え，研究のテーマを「家電製品からみた日米の衣食住」とした。家電製品という具体的な物を素材にしたため焦点がしぼられ，調査や教材開発を比較的スムーズに行うことができた。

(b) 現地調査の前に，どのような形でどのような内容のインタビューや資料収集をするかなどを細かく決め，質問紙なども用意していたことがよかった。

(c) 現地調査のための準備が全体会の機会だけでは十分にできず，チームでの会合をもった。

［現地調査について］

(a) グリーンビル，ミネアポリスでの現地調査では，パートナーの先生がいろいろなところを案内してくださるなど，たくさんのご支援をいただき，たくさんの素材を得ることができた。

(b) 現地調査では一日の活動量が多く，まとめや翌日の準備があまりできなかった。チームでの打ち合せの時間がとれるように配慮すべきであった。

(c) 教材開発の段階になって写真など未収集の資料がいくらかでてきた。できるだけ早く

教材のイメージを固めておき，調査のし残しがでないようにすべきであった。

［事後研究について］

(a) まだ現地調査の記憶が新しいうちに，事後研究の会をもったのは有効であった。しかし，全体会の機会だけではチーム内での作業が十分にできないのでチームでの会合をもった。

(b) 現地調査を終えて教材の作成終了までがあわただしく十分に吟味できなかった。

［教材開発について］

(a) 分かっていたことではあるが，やはり教材のイメージはできるだけ早い段階に固める必要がある。

(b) 作成した教材は実際に授業にかけていきたい。

② 来年度以降の課題

［事前研究について］

(a) テーマをより早く固めるために，開発する教材のイメージなどいろいろな情報をできるだけ多く知ることができるようにする。

(b) テーマには具体的な視点が必要である。

(c) 現地調査のための準備が全体会の機会だけでは十分なので，チームからの報告を短くしてチーム毎の話し合いの時間を十分に確保したい。

［現地調査について］

(a) チームでの打ち合せの時間をとれるように配慮する。

［事後研究について］

(a) まだ現地調査の記憶が新しいうちに事後研究の会をもったのは有効であったので，来年度も本年度と同様な日割りがよいと思う。

(b) 現地調査を終えて，教材の作成終了までがあわただしかった。少し時間的なゆとりがほしい。

［教材開発について］

(a) 分かっていたことではあるが，やはり教材のイメージはできるだけ早い段階に固める必要がある。

(b) 作成した教材を実際に授業にかけていきたい。

(3) チームＣ　（八松，鍵本，梶原）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) チームＣのテーマは，「日米の中学生の放課後の過ごし方の比較」とし，中学生の生活の共通点と相違点を比較分析し，その背景にある文化・歴史的伝統・国民性を研究していくこととした。具体的なことを題材として取り上げたため，焦点はしぼりやすかった。

(b) アメリカの中学生の生活については十分実態がわからず，アルバイトやボランティア活動についての認識には不十分なところがあり，現地調査の中で仮説を一部修正することとなった。

(c) パートナーにアンケートを送付し，アメリカの中学生の生活実態を知ろうとしたが，

こちらが予想した実態と開きがあったため，こちらの希望する結果は十分得られなかった。しかし，このアンケートによって，日米の中学生の放課後の過ごし方には多くの共通点があることが発見でき，有益な面もあった。

［現地調査について］

(a) グリーンビルにおいては，スペンス先生とウエストエッジコムスクールの先生方のこちらの調査の意図を汲み取った適切なコーディネートによって効果的な調査活動ができた。しかし，こちらの予備知識の不足から一つのことを理解するのに時間がかかってしまうこともあった。

(b) 一日の調査活動の後に検討の会を持ったことは，仮説の誤りを修正し，その日の調査事項を的確にまとめ，その中から問題点を明らかにして翌日の調査活動に備えるためにはとても有益であった。

(c) ミネアポリスにおいては，それまでの調査で不十分であった点の補足とアメリカの中での地域差がどれほどあるのかについて特に調査した。その中でも特に有効であったのが，現地で教師をされているパートナーのエリクソン先生との意見交換であった。これにより今まで不明確だったことがらも整理され，まとめの方向性を明らかにすることができた。

(d) 中学生の放課後の生活は，聞き取り調査やプレゼンテーションを見ることによって知ることができたが，実際の活動に随行できなかったのは残念だった。

［事後研究について］

(a) 全体で持たれた会合以外にも，チームで検討する会を数回持つことができた。分担した作業とともにこうしたチームで十分意見を出し合う場は，ぜひとも必要であった。

(b) 現地調査で作ったネットワークを生かして，不明なことを電話でたずねたり，必要な資料をファックスで送ってもらったりしてとても役立った。

［教材開発について］

(a) 早い段階で授業を行ってみて，その結果をふまえて教材づくりを進めることができたのはよかった。

(b) 当初から日米両国で使える教材づくりを進めていたが，若干のアメリカ側での手直しは必要なものの，両国でお互いの共通点を知り相違点から学びあえる教材ができあがった。今後は実際にアメリカ側でも授業をしてもらい，その反応を情報交換してよりよい教材づくりを進めてみたい。

② 来年度以降の課題

［事前研究について］

(a) 現地調査の前に自分たちの研究の基本的な構想を作り上げておくことが望ましい。そのためには，全体の会合以外にも，数回チームが集まって意見を交換する会が必要である。

(b) 事前により深い研究を進めておくためには，現地の情報の入手が不可欠である。確実に情報が得られるように，パートナーを早めに決定するとともに，１・２年次の研究協力者から話が聞ける場の設定があればよいと思われる。

［現地調査について］

(a) 現地での訪問先についての情報を前もって得ておきたい。ネットワークを使ってパー

トナーと意見交換ができれば，なお望ましい。

(b) 現地調査の途中や最後に，パートナーとじっくり話し合える時間があれば，調査したことをまとめたり深めたりするのに有効である。

［事後研究について］

(a) 可能であれば，教材作成の日程にもう少しゆとりをもたせ，実際に授業で使ってみながら検討を加えたほうがよりよいものができると思われる。

［教材開発について］

(a) １・２年次の研究協力者からどのような教材を作ってきたのか，あるいは作れそうなのか，計画の最初のころにアドバイスがあればもっと様々な形の教材が作れるのではないかと考えられる。

(b) 教材はそれぞれ単年度で完成しているが，場合によっては継続研究により，教材をより深いものにしていく必要性があると思われる。

(4) チームＤ（梶，石丸，野村）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) チーム全員で話し合う時間が限られており，全体に時間不足を感じた。そのような中で，年中行事について調査対象を３つに絞り込み，３人で分担して調査したことは内容を深め，調査の視点を絞り込む上で効果的であったと思う。

(b) 調査する場所・内容ごとに質問票を作成した。このことは現地調査の際，効率よく質問を進めることができ，後に内容の検討をする際に問題点が浮かび上がってきて有意義であったように思う。

［現地調査について］

(a) 年中行事の調査は，時期的に実際のものを調査することができないという問題点があったが，ＥＣＵベル教授より全く未知の行事を紹介され，またその行事に関係しておられる先生の話を聞くことができ，その後の調査の方向付けに大いに役立った。

(b) ミネアポリスでは，クリスティンヌ先生の家庭で，３カ月早い感謝祭のパーティーを体験できた。行事の雰囲気・料理・参加している人の気持ちなどを実際に知ることができ「現地に行かねばわからないことを調査しよう」という言葉の大切さを痛感した。

(c) 農場の風景・ネイティブアメリカンの保留地・ワシントンで入手した資料など研究テーマ以外のビデオや写真も今後の授業の様々な場面で生かしていける。ハードスケジュールではあったが，多くの場所でいろいろな体験ができたことは大きな収穫であった。

［事後研究について］

(a) 原稿締切までの期間が短かかったが，連絡を密にし研究会以外にも２度集まり，討議を重ねた。それぞれの職場で多忙な日々を過ごす身であることを考えると，この３回の研究会をもてただけでも精いっぱいだったように思う。

(b) 日々記憶は薄れる。まとめの作業は今回のように短期集中で行った方がよいと思う。

［教材開発について］

(a) 当初の計画ではワークシート形式の教材を考えていたが，研究会の中で助言をいただき，読み物教材へと方向転換した。結果的に，教材を使用する側の目的により必要な部

分を取り出して使用でき，また，旅行記の形式をとることで生徒の興味を喚起するという点では効果的な方法だったと思う。

(b) 旅行記の形式をとったことで，アメリカの行事についての考察の部分が多くなった。日本と比較して考える部分もあるが，結果的に日本での使用が中心となる教材となっている。さらに，アメリカからの訪問者が，日本の年中行事について調査にくるという続編ができれば，２つ併せて日米両国で使用できる教材になるのではないか。

② 来年度以降の課題

(a) チーム編成を早期に行い，事前調査の会合を多くもつ。

(b) 今年度のメンバーを何人か次のメンバーにいれて，失敗談・後悔している部分・効果的だった事などのアドバイスを常にできる状態にしておく。（今年度の３人の方のアドバイスは事前でも，現地調査の際にも非常に参考になった。）

(c) 多くの時間と労力を費やし完成した教材である。各自，指導案を作成し定期的に各県で研究授業を行うなど，この教材を生かせるような場を設けるべきではないかと思う。

(5) チームＥ（増井，松原，景山）

① 本年度の研究の評価

［事前研究］

(a) チーム内の話し合いが十分であったとは言いがたい。３人が一緒に話し合う機会が少なかった。

(b) 日本の高校生の夏休みの過ごし方との相違という点にこだわり，共通点についての調査が事前の段階では十分でなかった。

(c) アンケート調査が難しいということで，日米の高校生の意識の比較を統計的に調べるという点を準備段階では軽視しすぎていた。

(d) 「高校生の生活の比較」というテーマであったため，パートナーに要望して設定してもらった訪問先も当然，高校とか高校生が多く訪れる施設であると思って，パートナーに一任したのがよくなかった。十分に連絡を取り合って訪問先を確認すべきであった。「高校生も来る」施設と「多くの高校生が来る」施設との違いを我々が明確に意識しておれば，訪問先を早めに変えることができたのではないか。

［現地調査］

(a) グリーンビルでもミネアポリスでもパートナーが積極的に我々の意図を理解しようとしてくれた。また，具体的とはいえない訪問先の要望に対しても，いくつもの情報を提供してくれたので，おおいに助かった。

(b) グリーンビルでは，どちらかといえば，高校生の夏休みの過ごし方としては地域性が強く，先進的な取り組みや施設を紹介してもらった。結果として，一般的な事例としての情報が十分ではなかった。我々の方が，意図を十分に説明しきれていなかったためと反省している。

(c) グリーンビルでは，ホームステイ先での高校生のインタビューをさせてもらった。チームの３人がバラバラの時であったため，英語力不足による質問の不十分さやチーム全体の共通理解になりにくい等の問題があった。せっかくの機会であったので，十分活用できなかったのが悔やまれる。

(d) 我々の計画の不十分さから，最後の訪問先であったミネアポリスのパートナーに必要な情報を得るための協力を強いてしまった。パートナーは快く引き受けて下さったが，他チームと比較してハードスケジュールとなった。

(e) 後半の時期には，パートナーを交えて十分な意見交換をすることができたので，明確な結論を引き出すことができた。調査した内容や得られた結果について，このような話し合いの機会が持てたことは，大変有意義であった。

［事後研究］

(a) 3名の会合や連絡では，形式をどうするかの話し合いが中心となったため，最終的なまとめ方の部分については十分話し合えなかった。

(b) 9月には話し合うことができたが，10月以降，お互いの校務の忙しさで十分な情報交換ができなかった。

［教材開発］

(a) 生徒が視覚的にイメージをさせるために，スライドやビデオを作成することにしていたが，ビデオについては作業時間の関係で利用できなくなってしまった。

(b) クイズ形式を考えたところまでは良かったが，そのクイズで得られる情報と生徒に理解させたい全体像との間に若干のズレが生じてしまい，その後のまとめに苦労した。

② 来年度以降の課題

［事前研究］

(a) 現地で調べる内容については，現地の情報をできる限り得た上で決定した方がよい。そのために，できるだけ早くパートナーと連絡が取れるようにする必要がある。

(b) テーマは，現地調査の時期に確実に調査できる内容のものに限定した方がよい。時期を選ばないものが，一番確実と思われる。

(c) 現地でその都度パートナーと情報交換をすることが大切である。したがって，多忙な大学の先生方よりは，時間的に余裕がある立場の人の方がパートナーとしてはよいのではないか。

［現地調査］

(a) ビデオは一切使わずに，3名が相談しながら調べたり，各自の疑問を相手に質問するようにした方がよい。

(b) 調べる際には，その内容が一般的なものなのか，それとも特別なものなのかを意識して調査をする必要がある。

(c) 英語の先生への負担が大きすぎたように思う。できるならもう1名加わるとよいのだが。

［事後研究］

(a) まとめ方については，十分話し合う必要がある。そのような機会が多い方がよい。

［教材開発］

(a) 教材集の形は従来と同じになってもよいし，全然違う形式になってもよいと思う。それぞれのテーマや内容や対象の子どもの段階に応じて決めればよい。

(b) まとめる期間が短いように感じる。もう少し時間的余裕があると助かる。

(6) チームF（富村，鷹家，田中）

① 本年度の研究の評価

［事前研究について］

(a) 「食」の何を教材化するかについて，視点が絞りきれていない面があった。

(b) 昨年度の調査を踏まえたため，イメージは明確であった（調査方法・動き）。

(c) フィールドスタディの方法（情報の取捨選択）をより明確に持ったうえでの研究ができたらよかった。関連の文献を参照したり，第４回研究会での深沢先生の講話内容を具体化したりするなど，手だてを講じる必要があったと思われる。

［現地調査について］

(a) 「あれとこれを」でなく「あれもこれも」という現地調査に結果として陥ってしまった。教材を効果的に作成する面からすれば，同種のスーパーマーケットを何店も訪れ取材すべきところ，各種のマーケットを訪れ取材する結果となった。現地調査の内容を計画する際に，相当の焦点化を図っておくことが大切だと考えられる。

(b) 私たちが送付した「現地調査の計画」に基づき，パートナーの方々が周到な細案を立てていてくださったことは有り難かった。グリーンビルでの調査，ホームステイは万全の用意がなされていて，多くの成果を挙げることができた。また，ミネアポリスのファーマーズ・マーケットでの「モン族」の人々との出会いによって，「食」を通して異文化との接触を観るといった新しい知見を得ることができた。一方，精査する（モン族の人の一日を取材する等）ことは難しく，調査の深さが課題として残った。

(c) 現地受け入れ側の準備の都合もあろうかと思うが，グリーンビルにおけるホームステイは，２日間程度を設定し，より生活に密着した調査（共に料理する・買物をする等）ができればよかったと考える。また，今回の日程ではパートナーと食事を共にする機会が持てなくて残念であった。

［教材開発について］

(a) 昨年度の作成内容をふまえ，より具体的な教材の開発を試みた。ポスター，マンガ紹介式の読物，写真集など，分かりやすく使いやすいものができたように思われる。

(b) 教材作成にあたって，足りない素材の再収集は難しい。教材の最終イメージをもっておく大切さを感じるが，現地に行ってこその出会いもあるため，再収集ネットワークシステム（ファクシミリ通信等）の構築とシステム活用の活性化が求められる。

② 来年度以降の課題

［事前研究，現地調査について］

(a) 研究推進メンバーの継続が難しいわけであるから，テーマや成果の継承を確保していく試みが必要だと考える（新たにテーマ設定を行うのでなく同一のものとする等）。

(b) 前年度研究の概要紹介は，新テーマの検討や新チームの編成の終了後に行うのが望ましい。第１回研究会の前半に位置づけた場合，その内容が伝わりにくい（自己の問題意識が不明確なまま聞き取るため）と思われる。概要紹介は，第２回研究会または第１回研究会の午後へ位置づけた方がよいのではないか。

(c) フレンドシップパーティの意義の再確認が必要である。特に，アメリカ側パートナーの提供料理を，私たち日本側メンバーが食べ残してしまったことは，遺憾である。

(d) ＶＴＲでの教材作成を含め，より具体的で多様な教材形式を求めていく必要がある。

3. イーストカロライナ大学スタッフによる他者評価

(1) 広島プロジェクトに関する評価シート

Evaluation Sheet about the 1994 Hiroshima Project

Please answer the following three questions.
We are looking forward to having frank response from you.

Name: _____

Q1. Comments on the activities of the 1994 Hiroshima Project in Greenville, in August 1994.

Q2. Comments on the development of materials for understanding of American Society and Culture.

Q3. Suggestions for the improvement of the Hiroshima Project in future.

(2) 評価の結果

アメリカ合衆国現地調査の際の研究協力者として援助してもらったイーストカロライナ大学のメンバーを迎えて，フォローアップの会議を１９９４年１０月２１～２３日に広島市で開催したが，その際に自費で参加してもらったイーストカロライナ大学メンバーに対して，上記の評価シートによって，１９９４年度の広島プロジェクトについての評価をしてもらった。その結果は下記の通りである。

① ドン・スペンス博士

Ｑ１

現地調査のために選択された研究題目は，日本の生徒にとって大変関心のもてる題目である。グリンービル市での現地調査活動は，研究への入り口を切り開くという点では，意味があることであった。また，現地調査活動はノースカロライナ州の学校にとっても意味が大きかった。我々は，日本側の研究を通して多くのものを学ぶことができた。また，グリーンビルでの様々な社会的活動は，すばらしい学習経験になったと思われる。これらのすべての活動が，我々のパートナーシップをより強固なものに

作り上げてくれるものと確信している。

Ｑ２

異文化についての経験をもとに優れた教材を開発していくという挑戦は，つねに難しいことではある。アメリカ側の米日財団のプロジェクトにおいても，同様の問題に直面している。私は，次の２つの点で広島プロジェクトの取り組みを非常に高く評価したい。

1. 研究題目の選択や研究方法が綿密に計画されており，広島プロジェクトの進行中の計画は，より優れた教材の開発を確実なものにしていること。
2. アメリカ側の学校や教師も教材開発に加わることができるものとなっていること。最終段階では，日本とアメリカの学校のパートナーシップのもとに，同一のテーマについての教材開発を行っていくことができるし，行っていきたい。

Ｑ３

アメリカの学校の授業期間中に現地調査ができるように，次年度のスケジュールを改善することが必要である。現地調査活動をノースカロライナ州の学校の施設で行うことができれば，またプロジェクト終了後も学校対学校を基礎として活動を継続して展開していくことができるようなシステムを作り上げることができれば，それは今後のプロジェクトの発展にとって大変有益なものになるだろう。

② ヘンリー・ピール博士

Ｑ１

全体を研究チームに編成するというやり方は，アメリカ合衆国の生活や文化の異なる領域を研究することを可能にしているという点で，大変すばらしいものである。またそのことは，各チームが研究のニーズや基本的な考え方をもつうえでも非常に有効であるだけでなく，アメリカ側がそれらに応えてより意味のある活動をセットすることを可能にしている。

Ｑ２

教材は，現実のアメリカ合衆国を生徒に理解させるという点では，大変有効なものである。また教材は，一般的に伝えられていることのみがアメリカ合衆国の真の姿ではないということを理解させることや，アメリカ合衆国を認識する方法を生徒に理解させる上でも有益である。教材開発においては，社会や文化の共通点と相違点を示すだけでなく，違いの背景を分析すること，事象に対して「なぜ」と問うことが，生徒にとっては大変重要である。

Ｑ３

今後も現在のやり方で続けてもらいたい。このような関係を持続させていくことが必要である。ＥＣＵの参加者と日本側のメンバーとのコミュニケーションを続けてほしい。私も，チームＢとの関係を続けていきたい。アメリカ側の教師も日本側と共通の教材を開発し授業を行うパートナーシップを形成してもらいたい。このような機会を与えられたことに感謝したい。

③　ケーティー・タリー博士

Ｑ１
　このプロジェクトに直接は参加していないが，この週の観察の中で，次のことを感じた。
・確実性があり，開かれた関係であること
・高度な協力関係であること
・将来の展望がある有益な機会を与えていること
Ｑ２
・開発された教材の貸し出しが必要であること
・研究授業のビデオを開発すること
・授業の主要なポイントを描いたビデオテープを用いること
・他の関連領域にまたがるトピックも必要ではないか
・他の教師も開発された教材で授業ができるように，授業プランを付け加えること
Ｑ３
・プロジェクトのための情報や資料の提供をアメリカ側にお願いすること
・より有益な調査活動ができるように，調査時期を改善すること
・アメリカ側の新しいグループに対しても，前年度の研究を提供すること
・指導者や研究協力者の教師にもっと若い人（例えば，学生）を含めること
・ＥＣＵと広島大学の間に電子郵便のネットワークを作ること

4. 日本側評価者による評価

(1) 広島プロジェクトに関する評価シート

１９９４年度広島プロジェクトの評価

職名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1. １９９４年度広島プロジェクトのアメリカ合衆国現地調査について

(1) 特色と成果

(2) 問題点

2. １９９４年度広島プロジェクトの教材開発について

(1) 特色と成果

(2) 問題点

3. 広島プロジェクトの今後の研究の改善点について

(1) 研究のプロセス

(2) 現地調査

(3) 教材開発

(2) 評価の結果

① 岩田一彦教授（兵庫教育大学）

1. １９９４年度広島プロジェクトのアメリカ合衆国現地調査について

(1) 特色と成果

千葉，兵庫，鳴門といった先行プロジェクトにおいては，授業設計がなされ，それに必要な資料収集と，アメリカ社会の理解のために現地調査を行った。それ

に対して，広島プロジェクトは，授業設計とは切り放して，問題意識－仮説－検証のプロセスを明示した研究をし，現地調査で，必要資料の収集及びアメリカ理解を行っている。この方法の採用により，より鮮明な形での追究が可能になったという特色がある。

(2) 問題点

絞り込んだ形での現地調査の成果を，どのような場で生かし，アメリカ社会の理解の進展に資するかの検討が今後の課題である。

2. １９９４年度広島プロジェクトの教材開発について

(1) 特色と成果

研究課題が，国技，家庭生活，放課後の生活，年中行事，夏休みの中の生活，食文化，といった生活文化に絞られている。このように研究課題の範囲を狭く絞り込むことによって，より深いレベルでの教材開発ができている。また，アメリカ合衆国内に，教材開発の協力者集団を配していることも，より深い研究を可能にした要因である。英語で研究成果を作成していることが，アメリカの協力者集団との研究交流を可能にしていることも特色である。

(2) 問題点

小学校，中学校，高等学校のカリキュラムの中で，開発した教材をどのように位置づけることができるのかの検討が課題である。また，研究課題を，生活文化に絞り込んだ結果，日本とアメリカとが厳しく対立している側面での教材開発が不十分であった。厳しく対立している事実の理解が，本当の理解につながるという面にも眼を向けるべであろう。

3. 広島プロジェクトの今後の研究の改善点について

(1) 研究のプロセス

研究課題についての国内での文献調査をもっと厳密に進めたい。研究成果の報告書にも，調査に使った文献名を明示したい。

(2) 現地調査

アメリカ合衆国の協力者との連携による研究の推進が，本プロジェクトの特色である。今後，その体制をいっそう強めていくべであろう。

(3) 教材開発

既存の教材開発の継続性をどのように維持するのか，また，３年間の研究課題の構造化をどのように図るのかが，今後の課題である。

② 棚橋健治助教授（広島大学教育学部）

1. １９９４年度広島プロジェクトのアメリカ合衆国現地調査について

(1) 特色と成果

調査者自身の興味・関心に基づいて，事前に入念に練られた計画にしたがって小グループごとの調査がなされている。案内人の後をただついて行くだけの調査

とは異なり，ひとりひとりの役割を重くすることによって，単に情報収集の密度が高まるだけでなく，ひとりひとりが本当に合衆国を体験することになる。短期間の現地調査では，現地調査の直接的成果よりも，参加者がいかに合衆国を肌で感じるかの方が重要だとすら言えよう。その意味でも，今回の現地調査は大きな成果を上げていると言えよう。

(2) 問題点

特に見当らない。強いてあげるならば，合衆国の通常の授業期間中に実施できれば，さらに実り多い調査になったであろうと推察できるが，日本の教育事情を考慮すれば，その実現には多くの困難があることも十分予測されるので，今回のような時期の実施もやむを得ないと判断される。

2. １９９４年度広島プロジェクトの教材開発について

(1) 特色と成果

教材を開発する者自身が，現地調査で実地に見聞し，体験したことをもとにして教材開発を行っているので，文献研究では得られない生のアメリカ合衆国の姿が，子どもに生き生きと伝わる授業の実施が可能なものになっている。特に，教材開発者自身が，自分で合衆国を知りたいと思うことを，教材にしているため，子どもが何を知りたがるかをよく踏まえたものになっていると言えよう。

(2) 問題点

上記の「特色と成果」が，そのまま裏返って問題点となっている。教材開発者自身の興味・関心が強く反映されているため，子どもが合衆国を知るとはどういうことかの視点が弱い。そのため，興味本位とも思える内容も見られ，その授業を受けることによって，子どもに何が残るのか疑問に思えるものも見られる。

3. 広島プロジェクトの今後の研究の改善点について

(1) 研究のプロセス

各グループのテーマの決定に当たり，興味・関心とともに，それによって子どもに何をつかませるのかについても，より一層の検討の機会が必要ではなかろうか。単に「学びたい」の心理だけでなく，「学ばなければ」の論理も必要であろう。今回取り上げられたテーマで本当に合衆国社会がわかるのか，検討が必要であろう。そのためには，十分な文献研究も組み込む必要があろう。

(2) 現地調査

特に改善を要する点は見当らない。

(3) 教材開発

(1)に同じ。

Ⅵ　１９９４年度の研究の総括と今後の課題

1.　１９９４年度の研究の総括

(1)　１９９４年度の研究成果

日米の社会と文化の相互理解を目指した現地調査・教材開発，日米両国の教師の共同研究としての現地調査・教材開発，社会科教師２名と英語教師１名のチーム編成による現地調査・教材開発，日本語・英語の２ヵ国語の教材集としての教材開発，フォローアップおよび評価を重視した教材開発，以上のような昨年度の研究の特色は本年度においても踏襲した。昨年度の研究に付け加えての本年度独自の研究成果は，次の６点である。

① アメリカ合衆国と日本の社会と文化の背景にある歴史的伝統を相互に理解するための６つのテーマについての教材開発を行うための現地調査を，グリーンビル市（ノースカロライナ州）およびミネアポリス市（ミネソタ州）の２ヵ所において，アメリカ合衆国側のパートナーの協力の下に行い，その成果に基づいて，日米の生活文化の背景にある歴史的伝統の相互理解を目指した日本語版と英語版の６つの教材を開発することができたこと。

② アメリカ合衆国側のパートナーの多くが昨年度と同じメンバーであったことや，事前にパートナーを決定してチームごとに情報交換がなされたため，グリーンビル市とミネアポリス市でのそれぞれ３日間のフィールドスタディを通して，日本側教師とアメリカ側教師との間のより深い調査と，より強いネットワークづくりができたこと。

③ 昨年度は問題発見型の現地調査にとどまったが，本年度は，現地調査の場所が昨年度と同様のグリンービル市とミネアポリス市であったため，事前研究で設定した調査仮説に基づいた仮説検証型の現地調査を行うことができ，参加教師のアメリカ合衆国の社会と文化の背景にある歴史的伝統についての理解を一層を深めることができたこと。

④ 今年度は，日本側教師が日本の社会と文化をアメリカ合衆国に紹介し，アメリカ側パートナーがアメリカ合衆国の社会と文化を紹介するという方向で現地調査の活動やフレンドシップパーティを行ったため，日本側教師とアメリカ側教師との間でアメリカ理解学習と日本理解学習のためのより突っ込んだ情報交換ができたこと。

⑤ 今年度は，研究メンバーの自己評価だけでなく，フォローアップの会議のために自費で訪日してもらったイーストカロライナ大学のメンバーによる他者評価や，日本側の評価者による他者評価をしてもらうことができ，今後の研究の改善点がより明確になったこと。

⑥ アメリカ合衆国と日本の社会と文化を相互に理解するためのカリキュラム開発の視点として，次の３点を発見することができたこと。

(a) アメリカ合衆国と日本の社会と文化を相互に理解するということは，社会や文化の特色を生み出している人間の問題解決の姿の相違点と共通点を知ることを通して，アメリカ合衆国の社会や文化のアイデンティティとは何かを理解するということであり，社会や文化の背景にある人間関係の基本となっているもの（人間

と人間との結びつきを成り立たせているもの）は何かを理解するということである。また，そのことを通して，日本の社会や文化のアイデンティティと日本人の人間関係の基本となっているものを再発見するということである。

(b) そのためには，相互の社会や文化の相違点を比較によって知るだけでなく，相違点の背景にある社会や文化のアイデンティティや人間関係の基本を発見させるような，また日本の社会や文化のなかにもある共通する基本的なものを発見させるようなものとして，教材開発を行うことが必要であること。

(c) そのための教材としては，学校生活・家庭生活・地域社会生活・職業生活など中での人々の問題解決の取り組みの事例や，大切にしている伝統的な生活文化の具体的な事例を選択することが必要であること。

(2) １９９４年度の研究の問題点

研究メンバーの自己評価およびイーストカロライナ大学メンバーや日本側評価者による他者評価の結果に基づくと，今後改善すべき１９９４年度の研究の問題点は，次の４点である。

① 集中的に現地調査を行う都市が今年度はグリーンビル市とミネアポリス市の２都市であったため，調査活動の焦点を図ることができなかったこと。

② 現地調査の時期が学校の夏休み中であったため，学校見学が十分にできなかったこと。また，バケーションの時期と重なったため，ホームスティがグリーンビル市での１日しかできなかったこと。

③ ２週間で３ヵ所の滞在であったため，現地調査は十分行えたが，調査結果に基づいて相互理解のための討議を行う時間や教材開発のためのワークショップを行う時間がもてなかったこと。

④ 今年度は調査仮説をもって現地調査を行ったが，その多くが実際はあてはまらないことがわかった。その原因はアメリカ合衆国の社会と文化についての事前の理解の浅さに起因しているので，今後は事前研究における文献研究等の充実を図ることが必要であること。

2. 今後の課題

(1) 多面的なネットワークづくりの推進

今年度も昨年度と同様に，共同研究としての教材開発の活動を通して，日本側の参加教師とアメリカ側の参加教師との間のネットワークづくりはかることができた。しかし，それはまだ個人的な協力関係の構築や教師間の友情を深める段階にとどまるものであった。

今後は，日本の各小・中・高等学校とアメリカ合衆国の各小・中・高等学校との間の継続的なネットワークづくり，日本側の参加教師とアメリカ側の参加教師との間の継続的なネットワークづくり，児童・生徒同士のコミュニケーションの実施など，日米両国間の多面的な人的ネットワークづくりを進めていくことが必要である。

(2) 共同研究の質的発展

今年度も昨年度と同様，日本とアメリカ合衆国の社会と文化を相互に理解するための現

地調査と教材開発を，日米教師の共同研究として行うことができた。また今年度は，日本側教師とアメリカ側教師がそれぞれの社会と文化を相互に紹介し合い，学び合うという方向でそれらの活動を行ったため，ステレオタイプのアメリカ合衆国理解から脱皮することができたし，研究成果も大きかった。

今後は，相互に討議しながらの教材開発，相互に開発した教材の交換，日米両国での実践を通しての教材の改善・修正をはかっていくことができるようなシステムを作ることが必要である。そのためにも，教材開発のためのワークショップをアメリカ合衆国で行うことも必要になるであろう。

(3) 教材の修正・改善

今年度は，国技としてのスポーツ，家庭生活，放課後の生活，祭りや年中行事，夏休みの生活，食文化に焦点をあてて，日米両国の社会と文化の相互理解をはかるための教材開発を行った。しかし，短期間での現地調査に基づく教材開発であったことやカリキュラム開発のためのフレームワークが明確でなかったこともあり，相互理解のための教材という点ではやや課題が残った。また，社会や文化の背景の理解という点でも深く考察するまでには至らなかった。

今後は，カリキュラム開発のためのフレームワークや教材化の視点をより明確にしながら，日本での事前研究・事後研究，アメリカ合衆国での共同研究としての現地調査やワークショップなどを通して，教材の修正・改善をはかっていくことが必要である。そのためにも，文献研究を充実させていくことや，昨年度・今年度の研究協力者と次年度の研究協力者との交流を進めていくニューズレターの刊行などが必要であろう。

(4) 新しいテーマの教材開発

今年度は，日米相互の社会と文化を相互に理解するためのテーマとして，文化の背景にある歴史的伝統に焦点をあてて教材開発を行うことを試みた。しかし，必ずしも十分の成果はあげられなかった。

今後は，日米相互の社会と文化をより深く理解するためにも，今年度開発した教材の修正・改善をはかることと同時に，それに加えて，現代社会が直面している課題の解決という観点から，環境問題，外国人労働者の移住問題，多民族・多文化問題などについての教材の開発にも取り組んでいくことが必要であろう。

(5) 研究成果の普及・発展

今年度も昨年度と同様に，研究成果の普及に関しては，開発した教材が学校や公民館等においてできるだけ多くの人に利用され広く普及していくように，教材集やポスターという形式で教材開発を試み，開発した教材はできるだけ多くの関係機関に配布した。また，参加教師の多くは，勤務校や研究会等での実践・発表において，その普及に取り組んだ。

今後は，参加教師の学校での実践，教育センターや公民館での講座，研究会での発表，各地域でのワークショップなど，多様な方法で研究成果の普及・発展により積極的に取り組んで行くことが必要である。

編　集　後　記

広島大学国際理解教育研究会は，１９９３年１月より３ヵ年計画で「アメリカ合衆国の社会と文化を理解するためのカリキュラム開発研究」を行っていますが，ここに１９９４年度（第２年次）の研究成果の報告書を刊行いたしました。なお，報告書は，日本語と英語の２ヶ国語で刊行しています。

本研究報告書では，１９９４年度の研究の概要，１９９４年度の研究の内容，１９９４年度の調査研究，１９９４年度の教材開発，１９９４年度の研究の評価，１９９４年度の研究の総括と今後の課題について報告いたしました。本研究報告書の内容の中心をなすものは，中国地方５県の先生方によって，アメリカ合衆国のグリーンビル市およびミネアポリス市での現地の先生方との共同による現地調査の成果に基づいて開発された，アメリカ合衆国と日本の社会と文化を相互に理解するための教材です。いずれの教材も，広く学校や公民館等での学習に利用可能なように，具体的なものばかりです。多くの関係機関において活用していただければ幸いです。

本研究報告書を通じて，生涯学習時代の今日，学校・地域における国際理解学習，なかでも日本とアメリカ合衆国の社会と文化の相互理解学習が，多くの先生方によって一層推進されますことを念願しております。

（小原　友行）

本報告書は，米日財団（United States - Japan Foundation, USJF）の研究助成を受けて研究した成果を刊行したものである。

アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究　第2集

印刷　１９９５年１月３１日　　発行　１９９５年１月３１日

発行者　広島大学国際理解教育研究会　代表　溝　上　　泰
〒７３４　広島市南区東雲三丁目１－３３
広島大学学校教育学部
Ｔｅｌ．　０８２－２８１－３１４１（代　表）

印　刷　（有）　高　橋　謄　写　堂